継ぐ不戦

被爆者の高齢化が進む中、その記憶を受け継いで発信に力を注ぐ若者がいる。広島市安芸区の広島女学院大4年森長蓉子さん(22)。毎年8月6日、平和の尊さを伝える影絵展を地元で開いており、オバマ米大統領が広島を訪れた今年は、被爆者の証言を英語と日本語で紹介する絵本も制作した。「被爆者の証言が聞ける最後の世代として、受け継いだ記憶を未来に伝えていきたい」と力を込める。【1面参照】

通行人に影絵を紹介する森長蓉子さん ＝6日午後7時ごろ、広島市中区

「被爆者の声聞く最後の世代」

広島原爆忌に影絵展

黙々と作業をする通信兵、山菜を摘む少女、友人と家路に就く青年…。6日夜、広島市の平和記念公園近くの広場に、手作りの影絵がくっきりと浮かんだ。被爆者から聞き取り描いた22作品は「平和への思いをつなぐ」がテーマで被爆前の日常を表現した。作品を紹介する中高生の声に、通行人が1人、また1人と足を止め、黙とうをささげる姿も。「描いたのは当たり前に過ごしている日常の尊さです」と森長さんは言う。

祖父母が被爆した3世。原爆に関心はなかったが、中学3年生の頃、友人に誘われて参加した影絵展との出合いが意識を変えた。影絵作家らが8月6日に企画した影絵展。「初めはみんなと影絵を作るのが楽しかっただけだったけど、毎年参加するうちに平然と過ごしていた8月6日の重みを感じるようになった」。5年前、資金不足で大人たちが手を引く中、当時高校生だった森長さんらが活動を引き継いだ。

毎年違うテーマで手掛ける影絵の人物には目や鼻がない。描かれた人の気持ちを想像してほしいからだ。地元の学生ら9人で6月に制作し、小中学校に寄贈した絵本「青い空ヒロシマ」も手法は同じ。原爆で姉を失った少年が空に姉の形をした雲を見つけ、生きる希望を抱く物語は、同じ境遇の被爆者を題材にした。

被爆地で被爆者は毎年のように亡くなり、平均年齢は80歳を超えた。一方、原爆投下の日時すら知らない子どももいる。森長さんは卒業を遅らせて来春から休学し、平和活動に取り組む団体や個人の連携に汗を流すつもりだ。「若者が関心を持たないと、伝わるものも伝わらない。残された時間は限られている。私たちの手で関心の薄い人たちを巻き込み、記憶のバトンをつないでいきたい」(御厨尚陽)